

MAP

小別沢のむかしといま

い ちょう芋のような、生ハムのようなこの形。まるで、森に囲まれた地方の農村集落のように見えますが、これは札幌市西区の小別沢地区を切り抜いた地図です。もう少し俯瞰すると、札幌の中心部が見えてきます。

かつて、アイヌはこの地域を獵場とし、「ク・オ・ベツ（仕掛け弓を置く）」と呼んでいたといわれています。明治27年（1894年）に炭焼きが始められ、炭焼きの工夫として青森県人の我満嘉吉が最初に住み着きました。明治30年（1897年）5月に山火事が起こり、付近の山林10町歩程が焼けました。焼け跡に粟をまいてみたところ、思いがけなくよい収穫があったため、これが契機となって畑作を試みる人が次第に増えてい

きました。

明治35年（1902年）ごろになると、戸数7戸、人口24人の小部落となり、農耕に力を入れる人も増えました。しかし、田畑を作り上げたところに、明治43年（1910年）の春、またも山火事が発生。せっかく作り上げた田畑を含む辺り一面が、丸坊主になってしまいました。それ以来人々はくじけず、以前にも増して畑作に力を入れ、見事に焼け跡を農耕地としたのです。

さて、今の小別沢は……？今は、小松菜生産を中心とした畑作地域となっています。直売所の常連さんにとっては、新鮮野菜のマル秘スポット。山遊びが好きな人にとっては、街から通える身近な森林地帯。畑好きにとっては、森に囲まれた貸し農園のある場所。夜遊び好きな若者にとっては、心霊スポットだったり……。小別沢新聞では、この地図にいろいろな小別沢の姿を重ねながら、魅力を掘り下げていこうと思います。

小別沢の面積

約340ha

農地面積

8.8%

農地 30ha

森林面積

72%

天然林 192.87ha
 人工林 53.75ha
 合計 246.62ha

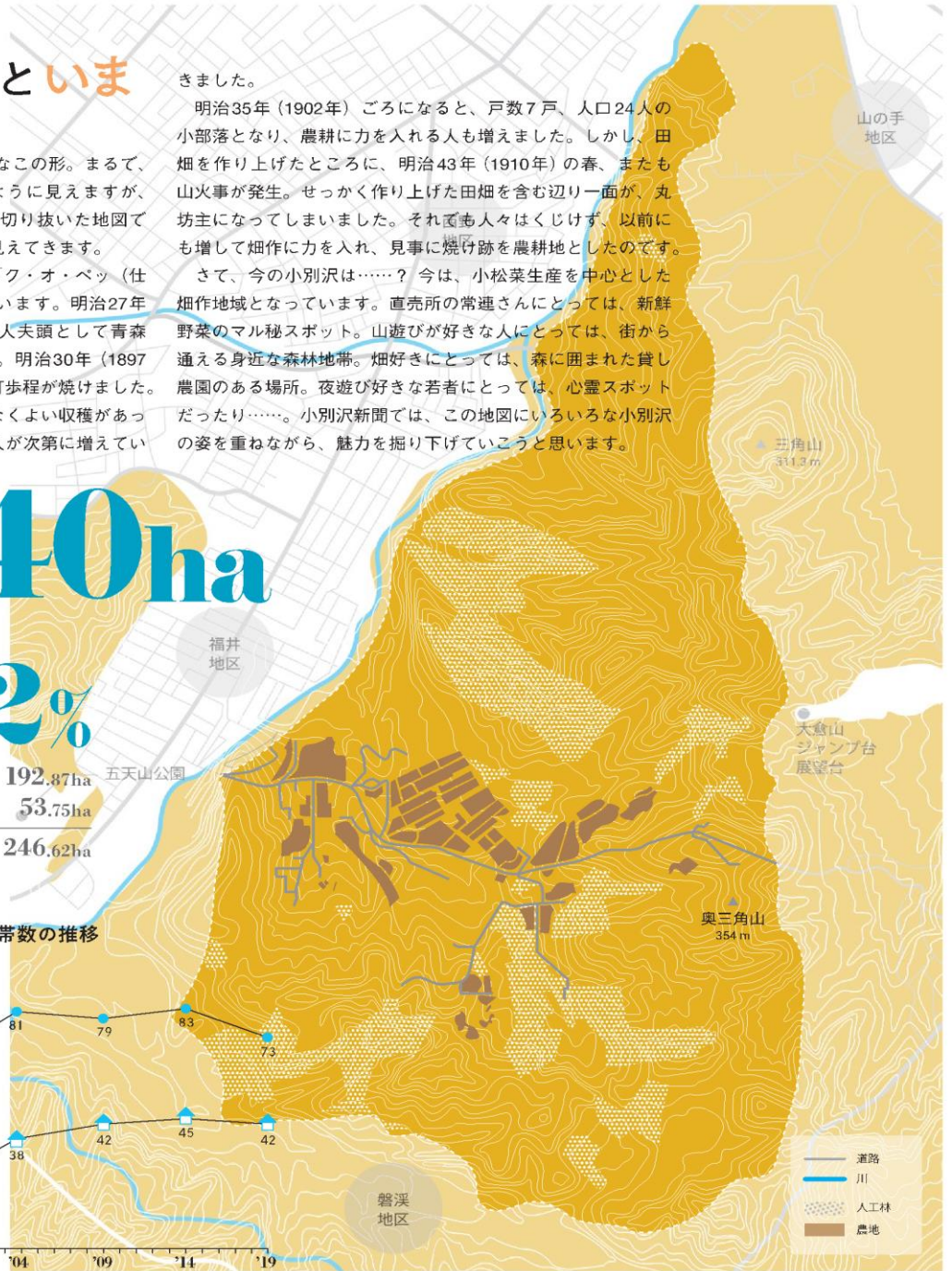
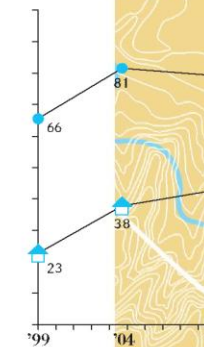
人口

73人

世帯数

42世帯

人口・世帯数の推移



memo



里山活性化 推進事業って？

里山活性化推進事業は、森林と農地の一体的な保全/活用策を検討/実施するために、札幌市により令和元年度に立ち上げられました。札幌市は、全国的にみても市街地と森林との距離が近く、自然豊かな景観/環境を備えた大都市です。この札幌らしい都市のあり方を作り出しているのが、市街地に点在する里山地区です。

里山地区とは、一般に、森林と人の営みが重なり合っている地域のことをいいます。この事業では、その中でも森林と農地が隣接し、農林が一体となって、自然と人が共生している地域をフィールドとして想定しています。

本事業を立ち上げた理由は、里山地区が直面している課題に対して、都市景観/環境の維持と保全のために、できる手立てを打つことにあります。札幌市周辺の里山地区は、農

業従事者の高齢化や担い手不足による農地の荒廃とそれに伴う景観の悪化、森林の放置や未活用状態、地域の人口減少に伴うコミュニティの希薄化等、農林を取り巻く環境は課題が山積んでいます。

その課題に対し、それぞれの里山地域の特性に応じた柔軟な農業振興施策、また、森林経営管理による森林整備促進施策を講じ、森林と農地を一体的に保全/活用ができる仕組みをつくることを目指しています。

具体的な動きとしては、令和元年度に、小別沢をモデル地区として位置づけ、地域の方々や農林事業者へのヒアリング、事業モデルの検討、意見交換会等を開催しました。令和2年度は、これまでの経過を踏まえながら、引き続き、小別沢の農地や森に係る魅力や可能性を探るために、イベントや小別茶話会を開催するほか、地域の方々や森林所有者などへのヒアリングも進めていく予定です。

令和3年度からは、小別茶話会を継続するほか、札幌市が森林所有者から森林の経営管理の委託を受け、意欲と能力のある林業経営者へ、森林の経営管理の再委託を進めていく予定です。

ぜひご参加ください！



Event

キックオフ イベント

10月開催予定

場所：和田さん宅付近
参加費：無料

※8月22日に予定していましたが、イベント内容の検討・調整に時間を要しており、やむなく、日程を変更させていただきます。

小別沢地区で採れる農作物や、森林を結んで楽しめるイベントを、和田さん宅付近で開催します。小別沢の農産物を味わったり、木を倒して薪にするワークショップなどを組み合わせて、小別沢の魅力を味わう試験的なイベントです。

地域外の方（30名程）を募り、里山活性化のヒントを得ようと考えています。小別沢にお住まいの方は飛び込みで参加可能ですので、ぜひお越しください。

memo

森林経営管理制度って何ですか？

前号の小別沢新聞で取り上げた「里山活性化推進事業」。

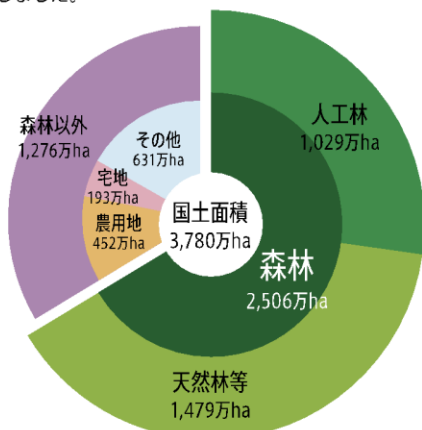
この事業が立ち上がった背景には、日本の森林管理の危機的状況があります。平成31年に施行された森林経営管理法。この法律に基づく森林経営管理制度が、この事業の基盤となっています。それらについて、取り上げてみました。

日本の森林について

日本は、国土のおよそ3分の2が森林です。森林は、大きく天然林と人工林に分けられます。戦後や高度経済成長期に植林された木々が育ち、人工林の約半数が資源として利用可能な時期を迎えようとしています。ただ、日本の森林所有形態は、小規模で分散的な上、森林資源への関心が薄く、適切に管理しながら資源を活用している人工林は多くはありません。

国内の森林資源を活用するためには、路網をつくり、木を切りだし、森林資源を利用しながら、持続的に森林を育成していく循環的な林業経営が必要になります。

そのためには、放置されている森林が適切に整備される仕組み。つまり、森林所有者と林業経営者のマッチングが急務となります。こうした状況に対応するために、「森林経営管理制度」が平成31年からスタートしました。



※出典：森林・林業・木材産業の現状と課題 / 林野庁 / 平成29年
 ※計の不一致は四捨五入による

森林経営管理制度

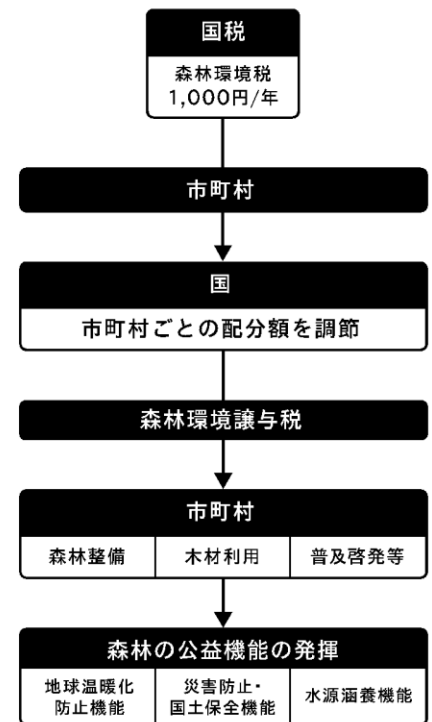
この制度は、市町村が森林所有者に適切な管理を促し、森林所有者が希望する場合は、市町村の管理のもと、森林所有者と林業者を結び合わせていく仕組みです。森林経営管理法（平成30年可決）によって、森林所有者には、適切な森林管理の責務が明確化されました。^{※1} それを受けて、平成31年度より、森林経営管理制度が施行され、森林所有者、さらには市町村にも森林の経営管理を円滑に行うよう努めることが求められるようになったのです。

この制度の基本的な仕組みは、森林所有者が森林を管理できない場合に、市町村が管理の委託を受けて、さらに意欲と能力のある林業経営者へ再委託をすることで、森林の経営管理を行うことにあります。これによって、管理されていない森林が、市町村の管理のもと、森林資源を循環的に利用される状態へ、さらには、持続的に森林管理が行われる林業体制を構築する基盤を作ろうとしているのです。



森林管理の財源は？ 森林環境譲与税って？

令和6年度から、森林環境税（国税）として1人あたり年額1,000円が徴収されます。この国税は、温室効果ガス排出削減、災害防止のための森林整備など森林を支える仕組みとして創設されました。そして、森林現場での課題は早急に対応が必要のため、課税に先立って、平成31年度から森林環境譲与税の市町村等への交付が始まりました。配分の詳細は割愛しますが、市町村における大きな流れとしては、図のようになりますので、ご覧ください。



まとめ

小別沢地区にも、手入れがされていない人工林があります。また、天然林（広葉樹林）も、昔は、薪炭材等のために、木を切りだしていたようです。小別沢地区の50年後の森林はどのような姿になっているのでしょうか。みなさんも考えてみませんか。

※1「適時に伐採、造林または保育を実施することにより、自然的経済的社会的条件に応じた適切な経営または管理を持続的に行わなければならない」（森林経営管理法 第3条より抜粋）

memo



作成：小別沢新聞社（有限会社）TEL 302-3333
発行：札幌市農政課 TEL 211-2406
配布先：小別沢町内会
小別沢に関わりのある農林事業者など

小別沢新聞

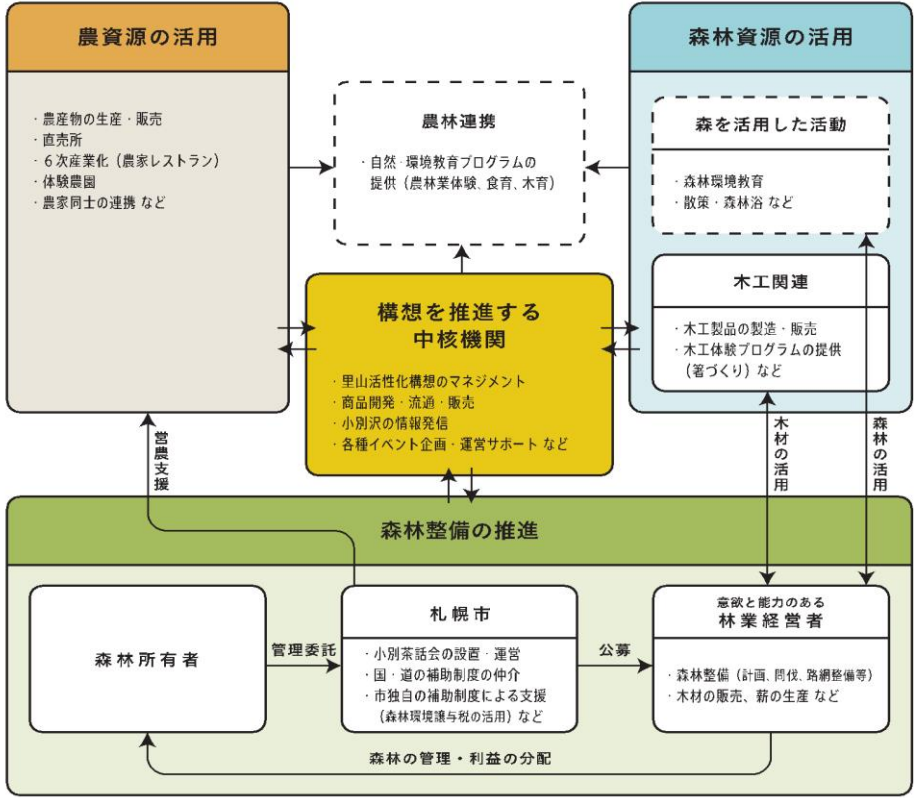
KOBETSUZAWA NEWS

札幌の市街地から車で10分。トンネルを抜けると、そこには森林と畑が織りなす里山がありました。

10
October 2020
#004

Information

〈事業の目標：森林と農地の保全・活用〉



森林整備のイメージ



農と森 ふたつの活用

来年度から森林整備が始まったとして、すぐに森林資源が活用できる状態になるかというそうではなく、森林作業道を作ったり間伐をする中で、次第に森林資源が活用できるようになっていきます（水色背景の部分）。農産物の活用に関しては、すぐに取り組めることと森林資源と農産物が掛け合わされて生まれてくる部分とがあるでしょう（橙背景の部分）。特に、森を活用した活動や農林連携の方向性については、今後、茶話会等の場で地域のみなさんと一緒に検討していく中で、少しずつ見えてくる部分になるだろうと考えられます。

R2	R3	R4
意見交換会（小別茶話会）の開催		
・事業説明、森林整備など	・地域の課題・将来像を話し合う	
イベント開催	・市民向けミニイベント開催	
森林整備（準備）	森林整備	※R5以降も継続
・森林所有者と交渉・契約	・林業者公募選定	
・森林整備の方針検討	・林業補助制度創設	

森林整備の推進から始まる活性化の道

前号では、「里山活性化推進事業」の背景にある「森林経営管理制度」「森林環境譲与税」について取り上げました。今号では、第2回の小別茶話会で説明させていただいた内容の一部を取り上げます。小別茶話会では、前回いただいた質問をもとに「事業概要の再説明」と「森林整備の進め方」の2点についてお伝えしました。その中から「本事業の運営体制のフレーム」と「事業スケジュールの予定」をお伝えします。

森林整備の推進の先にある2つの活用

本事業は、大きくは「森林整備の推進」を土台に、「農産物の活用」「森林資源の活用」を生み出すことを目

的としています。そのうちの「森林整備の推進」に関しては、前号でも説明したように「森林経営制度」が平成31年から始まり、それに伴い、札幌市としても市内の対象になる森林の所有者に対して、森林管理を適切に行うための意向調査/協議等を進めています。

森林整備の推進

小別沢の森林に関しても同じで、現在札幌市が森林所有者への意向確認を進めている最中です。それを図式化したのが、緑色の背景の部分になります。札幌市が中心となって、森林所有者と意欲と能力のある林業者を結び合わせ、適切に森林管理をする仕組みとなっています。景観や環境保全を重視し、皆伐ではなく、間伐による整備を行います。来年度には林業者の選定を始める予定になっております。

今年度は、3回の小別茶話会において本事業の全体構想と森林整備について、事業内容を丁寧に説明しているところです。この小別茶話会は来年度以降も継続する予定となっています。これから次年度以降の茶話会について運営方法を考えていくことになります。

第1回から話題になり前回の小別茶話会においても話題となったのですが、「構想を推進する中核機関」「農業分野に関する話し合い」「地域外の人の参加」が次回への大きな課題となっています。

memo

作成：小別沢新聞社（協賛株式会社）TEL 302-3333
発行：札幌市農政課 TEL 211-2406
配布先：小別沢町内会
小別沢に関わりのある農林事業者など

小別沢新聞

KOBETSUZAWA NEWS

札幌の市街地から車で10分。トンネルを抜けると、そこには森林と畑が織りなす里山がありました。



親子で里山体験を開催しました

お知らせしていた「親子で里山体験」のイベントを10月24日(土)に開催しました。定員の倍となる19組/60名の応募の中から、抽選で7組/大人10名、子ども10名に参加して頂きました。また、地元産で2組/大人2名子ども1名の参加もありました。前日の大雨、当日の低めの気温の予報など開催が危ぶまれましたが、だんだんと天気も回復し、日差しも暖か。普段は入ることのない小別沢の森や農を親子でたっぷり体験することができました。写真とともにイベントの報告をさせていただきます。

1. 市民農園伊部を通して森へ

集合場所はチエモクさん。運営スタッフが入り口に看板を持ってみなさんをお出迎え。全員が集まったところで札幌市農政課の石堂係長から挨拶があり、イベントが始まりました。バスツアーのように親子の一同とともに市民農園伊部へ向かいます。小松菜のハウスを眺めながら、閉園間近の貸し農園を上ります。片付け真っ最中でしたが、振り返ると紅葉がとても綺麗で、小別沢の景観を楽しみました。

2. きこりの仕事を知る

伊部さんの山林をお借りして森の中に集まる、きこりの登場です。皆伐をしない環境保全型林業に取り組んでいる陣内雄さんと足立成亮さんに来ていただきました。「きこりってどんなことしてるか知ってる？」という問いかけから、「木にも切って痛くないところがあるんだけどどこかな？」と、子どもたちと一緒に考えながら、森の中では生きている部分と朽ちていく部分があることなどを聞きました。



3. 伐採、薪づくり

きこりの仕事は木を伐るだけではないのですが、実際の仕事の一部を体験するために伐採作業を見せていただきました。チェーンソーや斧など仕事道具の話から、ニセアカシアを倒しました。鉛筆作りに使うための小枝を切り分けつつ、薪割りに玉切りにして軽トラに乗せて運びます。コツを教わりながら、子どもが薪割りに挑戦してみるものの、なかなか薪は割れません。

4. 小別沢を味わう

さて、昼食は小別沢会館へ移動し、アグリスケープさんで作っていただいたお弁当を食べました。家族ごとにテーブルに分かれ、食事と休憩時間。ちょっと一息。とっても美味しいひとときでした。スタッフは、ぽかぽか陽気の下、会館の外で食事です。

食事のあとに薪割りの続きをしにいく方もいました。こどもにとって薪割りってやってみたいかなものですね。

5. 木で鉛筆をつくる

講師に清水都太郎さんをお招きして、伐り倒したニセアカシアの小枝から鉛筆を作りました。枝を選んで好きな大きさに切ります。それから先端にドリルで穴を開け、そこへ鉛筆の芯を入れて接着。最後に芯を削り出したら鉛筆の完成です。色



のついた芯を入れると色鉛筆のできあがり。太い鉛筆や長い鉛筆、二股の鉛筆など、枝に合わせて色々な鉛筆ができました。

最後は自分たちの作った鉛筆で、アンケート

まとめ

を記入していただき解散しました。地域の多くの方々との協力で、試験的ではありますが、里山を楽しむイベントを開催することができました。参加者の方々からいただいた声は裏面に掲載してありますので、ご覧ください。みなさまのご協力、本当にありがとうございました。



親子で里山体験 参加者の声

参加者に書いていただいたアンケートの中から、一部抜粋して参加者の声をお届けします。

アンケート結果の概要 (回答者：大人11名・子ども11名)
「非常に満足・満足」……………100%
「また参加したい」……………100%

大人

- 木の話は大変勉強になりました。
- 近所に農業や林業が営まれていることを子供と身近に体験して理解を深めるきっかけになったと思う。
- 子どもにとって大変勉強になった。自然に触れ合う機会になる。
- 普段は歩いて入れない山道で、木のお話を聞き、薪割りもさせてもらった。
- 今さっき切った木から作った鉛筆がたたくて。すごく書きあじが良いです。大事に使います。
- 伐採のシーンを生で見られて面白かったです。
- たのしい、まんぞくしたよ。たくさんやりたいなっておもったよ。
- えんぴつのまわりに、けいとをまくのが楽しかった。
- えんぴつづくりに、たくさんえんぴつがつくれて、すごくてのしかった。
- 鉛筆づくりがまたしたいです。すごいすいまんぞくです。またしたい。
- えんぴつづくりに、木をえらんだり、しんをいれたりえんぴつのほかに色えんぴつもつくって、たのしかった。
- お食事とてもおいしかったし普段あまり接することのない林業の方の話聞いて、大人も子供も楽しく過ごせました。ありがとうございました。

子ども

memo

親子で里山体験アンケート

1. 満足度

2. 参加理由

3. その他



作成：小別沢新聞社（株式会社）TEL 302-3333
発行：札幌市農成部 TEL 211-2406
配布先：小別沢町内会
小別沢に関わりのある農林事業者など

小別沢新聞

KOBETSUZAWA NEWS

札幌の市街地から車で10分。トンネルを抜けると、そこには森林と畑が織りなす里山がありました。

2

February 2021

#006



小別沢におもうこと

▲寺家ふるさと村に広がる田園風景

「小別沢ファン」として

札幌市に勤めて間もない時に小別沢地区を訪れ、伊部さんの畑の上から手稲方向を見下ろした時の夕焼けがとても感動的でした。それ以来、小別沢ファンを自認しています。

しかし、なんとかがこの地域を守りたい、農林業を元気にしたい、と思ってもそう簡単でないことは十分承知しています。私の37年間の市役所生活で、同じような課題や問題に立ち向かっている人や地域を数多く見てきましたので、ヒントになりそうな事例をご紹介します。

事例紹介①

横浜市「寺家ふるさと村」

寺家地区の雑木林や田んぼ、畑地、ため池、水路といった里山の環境を保全しながら、住民自らが来訪者にサービス事業を提供するという、いわば住民主役の自然公園です。

▼横浜市が整備した体験交流館



整備にあたっては、農業者など地域の人たちが自ら書いた構想を基に、中核部分の体験交流館や駐車場などは横浜市が担い、直売所や体験農園、キャンプ場、ふるさとの森、農道などは地域住民が国や市の補助金を活用して整備するという役割分担のもとに行っており「ふるさと村」はまさに行政と住民の協働の作品といえます。自然環境を守りつつ、そこで生活する人の生業を活性化していく、という意味で注目したい取り組みです。



▲寺家ふるさと村
四季の家

事例紹介②

東京都練馬区の体験農園

札幌市と同じように食料自給率が低水準な大都市東京。その中で練馬区の農業は23区にある農地の約4割を抱え、様々な取り組みが行われています。幻の伝統野菜「練馬大根」の保全活動や、農業の支え手「ねりま農サポーター」を育てる活動のほか、私が注目したのは平成8年度から続く体験農園・畑の学校です。単なる貸農園とは異なる

▼利用者間の交流も育まれる練馬区の体験農園



▲練馬区の体験農園ではプロの指導を受けられる

り、プロ農家の丁寧な指導により、種まき、苗の植付けから収穫までを一貫して体験、プロ並みの品質の作物が得られるというのが特長です。一部の農園では、年間30品目くらいを体験。料金は30㎡で3万8千円（区民外は5万円）とやや高価ですが、利用者には農業の理解が深まるだけでなく、園主や利用者同士のコミュニティーも育まれると大変好評だそうです。



▲わりまの農業

トンネルを通して小別沢へ

この原稿を書くにあたって北海道大学文学部の宮内ゼミがまとめた「聞き書き 小別沢」というレポートを読みました。その中に小別沢トンネルの思い出を語る人が多く、トンネル開通以前の皆さんのご苦労は想像を絶するほどのものだったことがうかがえます。

かつての小別沢トンネルは、農家が街に出て、種を得るための貴重な存在でしたが、今度はそのトンネルを通して街の人たちが小別沢にやってきて、食や農の体験を通して生活を豊かにしてもらおうと試みてみてはどうでしょうか。上記の事例も併せて未来を描いてみると、先ほどの「聞き書き 小別沢」の中で、何人かの女性が語っている「農業は健康で人の役に立つ」「小別沢は静かで良いところ」「変な開発は嫌だ」という声にも応えられるような気がしています。



三部英二 | Sanbu Eiji

1979年に札幌市入庁。農業センターにて野菜の品種・技術改良と農家指導を担当。その他、サッポロさとらんどの整備や、伝統野菜の保全などに努める。現在は種工場やバイオガス発電事業に携わる。

memo